

平成16年度

愛知高等学校入学試験問題

国 語

注 意

1. 問題は□一と□二があります。

2. 問題の内容についての質問には応じません。

印刷のわからないところがある場合には、静かに手をあげて監督の先生の指示に従いなさい。

3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

記述問題においては、句読点は字数に数えることとします。

氏名、受験番号を書き落とさないように注意し、解答し終わったら必ず裏がえして机の上に置きなさい。

4. 解答用紙だけを提出し、問題用紙は持ち帰ってよろしい。

□ 一 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

二〇〇一年秋、わたしは四年ぶりに長島精工の現場を訪れた。NHK人間講座「ものづくりの時代——町工場の挑戦」の撮影のための訪問だった。その合間に長島さんと現場を眺めながら雑談していて、ふとわたしはあの青年のことを思い出した。

「ほら、あそこで働いているのが彼ですよ」

わたしはもう何時間もその現場にいたのに、^①そう教えられるまで気がつかなかった。むろん顔を憶えていたわけではない。しかし、四年前にはすぐにそれとわかった身体障害者が、もうすっかり現場の男たちにとけこんで働いていたので、気づかなかった。

「ええ、やはりね。俺は^{おれ}こんなに腕をあげてこんな仕事をこなせるようになったのに、あいつと同じ給料じゃアホくさい、という若者がひとり出ました。それなら君に彼のような気働きができるのか、彼は現場のみんなの潤滑油の役を果たしているではないか、と説得しました。一度はそれでおさまったのですが、^③やがてまた同じような不満を言いました。たしかに腕はよかったです。二度までは許せません。クビにしました」

工場の熟練は、工芸家や^{注1}居職の職人たちの技とちがって、いつも集団のなかで育ち集団のなかでのみ発揮される。ひとりで完結するような仕事はほとんどない。すぐれた工作機械を作ろうとしたら、現場の人間が心をひとつに合わせて仕事をしなければならぬ、^④ということを誰よりもよく知っているからの、長島さんの^④つらい決断であった。

現場に居合わせることによって、わたしは^アたくさんの人びと

から、人はどう働きどう生きるべきかを学ぶことができた。

見習工のころ、「働くとははたを^ま楽させるということなのだから、つらいのは当たり前」だと教えられて、なるほどそれこそうだと感心してしまったことがあった。食べるためには働かなければならない時代だった。あの時代、日本人の^{注2}エンゲル係数は五〇パーセント近かった。いまは二〇パーセント以下と聞くから、^{□ I}がある。働かなくとも食べられるというわけではないが、やがて食べるくらしいのことはどうにかなる、という経済的には豊かな時代になった。

アメリカに追いつき追い越せで、日本じゅうが^{□ II}働いて得た「豊かさ」であった。その豊かさの裏で、日本は「負の遺産」をたくさん残してきた。公害に代表される環境破壊、農業の荒廃、地球資源のむだ^⑤使い……とあげればキリがない。その「負の遺産」のひとつに、労働に対する人びとの考えかたの変質がある。

物質的な豊かさに^{注3}溺れると、人はそのモノの価値を見失う。かつて人びとはモノのうしろに、^①それを育てたり作ったりする人びとの^②労苦や技を見る目を持っていたが、それが見えなくなつた。モノの利便性や経済的な、つまり実用的な価値しか見えなくなる。モノに対する価値判断が実用的になれば、労働に対する^③それと同じことである。

^ウ自分で額に汗して働くよりは、他人に作らせてそれを安く買う方法を考えようとする。産業の二重構造をたくみに利用して、中小企業が作ったモノを大企業が売る。いつの間にか大企業労働者の生涯賃金を一〇〇とすれば、小企業労働者のそれは六〇にまで差が開いてしまう。実際にモノを作って働くことのバカ

バカしさといった風潮が、^{注3} 3K労働なんていう言葉を流行らせた。

^{注4} マイクロ・エレクトロニクス技術の普及が、その風潮に拍車をかけた。生産現場のあらゆる分野で、人よりも機械が優先される。機械に合わせて人が働かされる。その結果多くの労働者は、限りなく怠惰な労働を強制されているにもかかわらず、それが楽な仕事だと錯覚してしまう。マニュアルに従って働いて（動いて）さえいければ、モノは作れる。ほんとうは作っているのではなく、作らされているにすぎないのである。その結果、労働がどんなに味気ないものになっても、カネになればいいという風潮を増長させた。

労働の意味の喪失も、大きな負の遺産のひとつとして、いまの日本に重くのしかかっている。

“奢れる者久しからず”のことわざのとおり、モノの豊かさに溺れた日本経済はいままさに混乱し続けている。働きたくとも職がない人びとがあふれている。若者たちの多くは、就職できないから、フリーターでその日暮らしを余儀なくされている。それなのに一部の人は、それをも“働く形態の多様性”などと、さも豊かさの表れのごとく言いくるめようとする。強制される怠惰な労働が、決して豊かな労働ではなかったように、職を選ぶ自由を失ったフリーターが、豊かな気持で働けるわけではない。

現代は、よほど用心してひとりひとりが自分の労働、自分の仕事を見つめていないと、^⑦ 足をすくわれる時代である。

そんな日本の社会の底辺で、^⑧ 働くことが生きること、生きる

いるわけではない。農村にも、学校にも、医療や福祉の現場にも、いや大きな企業のなかにもむろんいるのちがいない。それらの人びとの存在に目が届かないのは、わたしの視野の狭さのせいにはすぎない。

（小関智弘『働くことは生きること』より）

※注

注1 居職：自宅で仕事をする職業。

注2 エンゲル係数：家計の総支出の中で、食費のしめる比率を百分比で示したものの。係数が高いほど生活が苦しいとされる。

注3 3K労働：『きつい、汚い、危険』と若者から敬遠される三条件がそろった「嫌われものの業種」の代名詞。

注4 マイクロ・エレクトロニクス：集積回路の高密度化・微小化を追求する電子工業技術。とりわけ、マイクロコンピュータの開発、製造、応用などの先端産業。

注5 余儀なくされている：しかたがないこととして受け入れさせられている。

問一 空欄 I には（非常に大きな違い）、II には（夢中になって努力して）を意味する語句が入ります。最も適当なものそれぞれ選び、符号で答えなさい。

I

ア 雲泥の差 イ 是非の差 ウ 縦横の差

エ 春秋の差 オ 首尾の差

II

ア 肝に銘じて イ 血まなこになって ウ 雀の涙で

エ 尻馬に乗って オ 鶴の一声で

問二 傍線部①「そう教えられるまで気がつかなかった」のはなぜですか。その説明となっている部分を解答欄に合うように、二十字以上二十五字以内で抜き出して答えなさい。

問三 傍線部②「潤滑油」とありますが、何の比喩として用いられていますか。最も適当なものを選び、符号で答えなさい。
ア 注文通りの仕事ができるよう技術指導を怠らないひと。
イ 働く人たちのやる気をそがないよう励まし続けるひと。
ウ 上司や同僚に頼まれたことを嫌がらず引き受けるひと。
エ 工場内で生まれる不平や不満をす早く解決できるひと。
オ 職場の人間関係がうまく行くように心配りをするひと。

問四 傍線部③「同じような不満を言いました」とありますが、この「若者」は、働くことに関してどのような考えを持っていて、どの想像できますか。最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 仕事において有能かどうかは、優れたモノを作り出せる指導力の有無にかかっている。
イ 職場においては、お互いに技術を磨き合い高度な製品を生み出す努力をしなければならない。

ウ 仕事の報酬は、あくまでも個人の技能の高さや仕事の成果によって決められるべきである。

エ 職場での円満な人間関係は、同等の技能を身につけて初めて成り立つのである。

オ 従業員の給料は、個人の技術力と勤続年数によって差をつけるのが当然である。

問五 傍線部④「つらい決断であった」とありますが、長島さんのどのような思いが込められた表現ですか。最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 工場の熟練にとつて大切なものは何かを理解してもらえなかった無念な思い。
イ 障害者を雇用する義務を課せられた経営者の立場を理解してもらえなかった悔しさ。
ウ 腕のいい工具を雇えるかどうかは給料の額しだいであることを知らされたむなしさ。
エ 自分の工場では若者の工具としての技術を十分に生かしてあげられなかった申し訳なさ。

オ 経営者としての都合だけで有能な若者を解雇する結果になったことへのうしろめたさ。

問六 傍線部⑤「労働に対する人びとの考えかたの変質」について、どのように説明されていますか。次の説明文の空欄に入れるのに最も適当な語句をこれ以降から抜き出し、十字以内で答えなさい。

労働に対する になったこと。

問七 傍線部⑥「その風潮に拍車をかけた」の内容説明として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 汗を流して働くことを嫌がる世相を急激に変えた。

イ モノ作りを敬遠する傾向をいっそう強めた。

ウ 製造業での働き手を育てる雰囲気は消してしまった。

エ 実際のモノ作りを軽視する流れを一時止めた。

もえた。それが何か、たしかめようと考えながらBの笑顔に相変らず眼を向けていると、Bの顔が笑顔のままかすかに硬張ったようにおもえた。

その瞬間、Bが言った。

「Aちゃん、屋根に登ろうよ。雪の積もった屋根つて、きつと面白いぜ」

その言葉に、^②むしろ救われた気持になり、Aはいそいで屋根に登った。

雪は降りやんで薄陽が射しており、平家建ての家屋の屋根は銀いろに光る斜面になっていた。AとBは、屋根の二つの斜面が交わる稜線にまたがって、あたりの雪景色を眺めまわした。

二人の少年の視線は、遠くの方からしだいに近くに移り、やがて自分たちの足もとに戻ってきた。

「いいスロープができているなあ」

Bは銀色の斜面に眼を落として、

「ちよつと、滑ってみようか」

と言い、はやくも体の位置を動かしてはじめた。

「あぶないよ」

Aが言ったときには、すでにBは立ち上がって、足もとにひろがつている白い勾配に眼を落としていた。いくぶんふざけ気味にスキーをしている姿勢を取った瞬間、腰がくだけて尻もちをつき、そのまま斜面をずると滑り落ちて行った。そして、腰をおとした姿勢のままその体が軒から飛び出し、あつけなく消え失せた。

「わあ——」

Bの叫び声が空間に残り、そのまま静かになってしまった。

平たく綺麗に降り積もった屋根の雪の上に、Bの滑った尻の跡が、真一文字に幅広く残っているだけだ。

「おーい——」

Aは大声で呼び、おもわず立ち上がったが、よろめいてすぐに屋根の稜線の上に腰をおとした。しばらく、雪に覆われた風物と白い屋根のひろがりの中に、すべての音が吸い取られてしまう時間があつた。

すると、屋根のすぐカタワらの塀の上に、ひよつくりBの頭が浮かび上がってきた。健康色に赤く盛り上がった頬の上に笑っている細い眼があつた。

「はっはっは、失敗、失敗」

機嫌よくBは言い、塀から屋根に移ってきた。

「だいじようぶかあ」

「だいじようぶさ。下もいっぱい雪が積もっていてね、ふとん綿の上にストンと落ちたみたいなものだった」

Bの頬の赤さは、愉快な冒険をした興奮の色のように、Aの眼に映つた。Bが無事だったことに、Aは安堵し、Bの愉快さがそのままなおにAに伝わってきた。

「はっは、ぼく吃驚したよ。だけど、さっきの君の恰好は、なかなか傑作だったよ」

AとBとは、あらためて腹の底から笑い合い、雪の積もった屋根の上で、二人の少年の人間関係はこの上なく滑らかであり、陽に照らされて銀色に輝いていた。

しかし、その日、^⑤異変は地面の上で起こつた。

機嫌よく、AとBは屋根から降りた。灰白色の薄い雲が切れ、しばらくの間、太陽の直射光が雪の上を照らしていたが、

すでに時刻は夕方になった。太陽は光を弱め、だいたい色の陽が薄くあたりに拡がっていた。

「日が暮れてきた」

Aが言うと、

「でも、まだ暗くなるまでには時間があるよ。Aちゃん、ベエゴマをしようか」

と、Bが誘った。

路地に棲む少年たちの遊びは、ベエゴマとかメンコ^{注3}である。そしてBは、その種の遊戯でも、路地の王者である。Aが及ぶわけではない。塀の上屋根の上では、Bの腕前に混じり気なく感^cタンするAも、地面の上のこれらの遊戯でBに打ち負かされると、無性に腹立たしくなるのだ。

「負けるから、厭だ」

とAは答える。

「それじゃ、メンコをしようか」

「地面が濡れているから、ダメだよ」

「困ったな。おすもうの写真が、いつまで経っても借りっぱなしになってしまふな」

BはAをメンコの遊戯で負かして、その借りを消そうと考えているらしい。

「あれはもういいよ」

むしろAは機嫌よく答えた。二人の少年の上機嫌は、イ然として続いていた。そのとき、短い叫び声が、AとBの口から同時に出了た。

雪が消え、白く乾いたセメントの石畳がのぞいている歩道の隅に、雀の子が落ちていたのだ。どうしてそんな場所にいるの

か分からぬが、死体ではない。微かに羽根を動かしているのが見える。

Aは背をかがめ、その雀の子に手をのばした。なまあたたかい体温が指先に触れた瞬間、Aの体は激しく突きとばされた。

二、三步、前にのめって踏みとどまったAが振り向くと、両手の掌をしゃくい上げたBが脚を踏ん張って立っていた。

「その雀、ぼくに呉れよ」

Aは、それが当然の口調で言った。言い終わった瞬間、いま自分の背に加えられたBの力の荒々しさをアザやかにおもい浮かべた。

「厭だ」

Bは雀の子を載せた二つの掌を胸もとに引きよせて、きつぱりと言った。

「なんだ、ぼくが先に見付けたんだぞ」

「ちがう、ぼくが先だ」

「こつちへ呉れよ」

「厭だ」

Bの頬は、赤く染まっていた。^⑥その赤さは、さっきの屋根の上でのものとは、違った赤さである。Bの胸もとに伸ばしたAの手は、Bの片手で激しく振り払われた。BはAに背中を向けると、黙って坂の上に向かって歩き出した。Aを拒否している激しい線が、その背中に露わになっていた。

胸の前に、Bは大事に雀の子を捧げもって歩いてゆく。

取り残されたAは、坂道の途中で棒立ちになっていた。Bに激しく振り払われた手の甲は、赤く腫れていた。口惜しさが、Aの心の中で疼いた。と同時に、^⑦その赤く腫れた肉は、Bに対

して償いをした跡のように、Aの眼に映ってきた。

(吉行淳之介『子供の領分』より)

※注

注1 稜線…山の峰から峰へ続いている線。尾根。

注2 ベエゴマ…「ばい」の貝殻に、溶かした鉛を流し込んで作ったこま、また、その形に似せて鉄で作った小型のこま。

注3 メンコ…円形・方形に切ったボール紙に絵をはった子供の遊び道具。

注4 しゃく上げた…すくい上げた。

問一 二重傍線部 a 「ス手」、b 「カタワら」、c 「感タン」、

d 「イ然」、e 「アザやかに」のカタカナの部分の漢字で書きなさい。

問二 空欄 I にはB少年の思いを作者が代弁することば

が入ります。傍線部①「Bは手袋をはめた手を差し示して、笑顔をつくった」と関連させて、入れるのに最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

A おばあちゃんに編んでもらった手袋、ほらこんなに暖かいですよ

I 去年買ってもらった手袋大事に使っています、まだ新品みたいですよ

ウ この手袋Aちゃんが僕にくれたんです、手も痛くないし雪もへっちゃらですよ

エ もらった手袋は大切に取っておいて、今年もはめていきますよ

オ 手袋くれたのおぼえてる、少しちぢんじやったけど気に

してませんよ

問三 傍線部②「むしろ救われた気持ちになり」とありますが、

どのような心理の状態から「救われた」と考えられますか。

Aの心理を説明したものととして最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 祖母の愛情が自分からB少年に移りつつあることに、嫉妬しつに似たものを感じ始めていた。

I 自分の割り切れない思いを確認することに、無意識ではあるが不安めいたものを感じていた。

ウ 人の善意をすなおに受け入れるBの性格をうらやむ一方、憎らしく思う気持ちも生じていた。

エ 他人の顔をうかがい、あれこれ思い悩む自分の情けなさを強く意識しつつあった。

オ 自分の心で動くものが何なのかはつきりと予測できるだけに、確かめるのが怖かった。

問四 傍線部③「雪に覆われた風物と白い屋根のひろがりの中

に、すべての音が吸い取られてしまう時間があつた」という表現は、『静寂の時間が続いた』ということのほかになんか

ことを表していると考えられますか。説明として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

A Bのように滑る勇気のない臆病おくびょうさにうんざりしているAの内面を表している。

I 遊びのライバルであるBを失うのではないかというAの動揺を表している。

一

問七	問六	問三	問二		問一
イ	価	オ	け	も	I
	値		こ	う	ア
問八	判	問四	ん	す	II
エ	断	ウ	で	っ	イ
	が		働	か	
問九	実	問五	い	り	
エ	用的	ア	て	現	
			いた	場	
				の	
				男	
				た	
				ち	
			から	に	
				と	

二

問八	問七		問六	問二	問一
ウ	の	愉	塀	エ	a
	色	快	の	素	ス手
		な	上	問三	b
		冒	屋	イ	カ
		険	根		タ
		を		問四	ワ
		した		オ	ラ
		た			c
		興		問五	感
		奮		ア	タ
					d
					依
					イ
					然
					e
					ア
					ザ
					ヤ
					カ
					ニ

氏名
受験番号

--	--	--	--	--	--	--